

【霧隠れ三郎太 “霞の術”】

作…永妻 晃

舞台中央に二人の男女が立つ。

霧隠三郎太きりがくれさぶろうた（〇〇歳）と歳若き娘、小袖こそで（〇〇歳）である。

小袖「えい！」

小袖、拳こぶしを三郎太に突き出す。

三郎太「ぬッ」

その拳を素早くひねり小袖を突き放す。

小袖、身ひるがえを翻すや、十字手裏剣を投げ打つ。

三郎太、十字手裏剣をすべてかわす。

三郎太「小袖、しかと相手を見据えて十字手裏剣を撃て」

小袖、急に身体を萎なえ、

「……あああ〜」

三郎太「どうした!?!」

小袖「小袖はもう疲れ果てました」

三郎太「何だ、そのザマは！ 小袖ッ、お前は常々日本一の女忍者“くのー”に成りたいと申しておったではないか！ これしきの修行で根を上げるとは情けない！ 陽の出から陽が落ちるまで、サンライズ・サンセット、日々修行じゃ！ 訓練じゃ！ 勉強じゃ！ その努力をせぬ者を『怠け者』と呼ぶ。怠け者は“忍び”にあらず。この伊賀の郷”から立ち去り、仲間の待つ、上野動物園の檻の中で暮らせ！」

小袖「上野動物園のなまけもの？」

三郎太「そうじゃ、あの者たちはすべて忍者失格の成れの果てだ！」

小袖「知りませんでした。本当ですか？」

三郎太「ま、今の事は聞き流せ」

小袖「なんだ、冗談」

三郎太「たとえじゃ、戒めじゃ」

小袖「……（甘ったれて）だって、三郎太」

三郎太「こらッ、また“三郎太”と、呼びつけで！ ちゃんと霧隠三郎

太様と言いなさい。いや、わたしはお前に忍びの術を教える先生だッ。

お師匠ししやうさまと呼びなさい」

小袖「三郎太を？」

三郎太「三郎太ではない、お師匠さま！」

小袖「お塩さま」

三郎太「塩ではない！ 血圧が上がるではないか」

小袖「……砂糖」

三郎太「砂糖は糖尿病になる！」

小袖「山寺の和尚おじやうさま」

三郎太、木魚を叩く仕草をし、

「ポクポクポクポク、ナンマイダー……これ！ もうよい！ 今日

はこれまで、終わり、礼！」

と、立ち去ろうとする。

小袖「待って、お師匠おしやうさま！」

三郎太、にっこりと振り返り、

「……（優しく）何だ？」

小袖「お師匠さまの“霧隠れの術”お見せ下さるなら、小袖、死に物狂いで頑張りまする」

三郎太「……」

小袖「甘ったるく）おねがい〜」

三郎太「その甘ったるい言い方はよせ！」

小袖、威を正し、

「お師匠さまの秘術“霧隠れ霞の術”、お見せ下され！小袖、一生のお願いでござる。さすればどのような苦行にも耐えてみせまする！」

三郎太「……」

小袖、合掌して丁寧に頭を下げ、

「この通りです。天地神明に誓って！」

三郎太「……よし、その言葉に嘘、偽りはないな！」

小袖「これでも、小袖は『くの一忍者』のはしくれ、偽りはございませぬ！」

三郎太「よし、承知した。“霞の術”を見せて進ぜよう！ 確と見てお

け！」

小袖「はい！」

三郎太『三郎太、懐より“霞の玉”を取り出すとボン！ と床に叩き

つけるや否や、一瞬に辺り一面に霞がかかり……三郎太の姿はポーッ

と見えなくなる』

小袖「それ、台本の『ト書き』じゃないですか？」

三郎太「予算の関係じゃ、許せ！ ポーッ」

三郎太、両手を広げ自分が霞の中に消えて行く仕草。

小袖「……これは、何としたことか、お師匠さまのお姿が？」

三郎太、あちらこちらと動き回り、小袖に声を掛ける。

三郎太『小袖』

小袖「(驚く) はいッ」

三郎太『どうだ、“霞の術”』

小袖「驚きました！」

三郎太『わたしが見えるか？』

小袖「見えませぬ……どこにおいでか？」

と、言いながらも三郎太を確り見据え、動き回る三郎太を追う。

三郎太『ちよつと待てー！ 何かわたしが見えてる様だぞ』

小袖「いえ、決して見えておりませぬ」

小袖、三郎太から視線をそらせ。

小袖「お師匠さま何処に？」

三郎太「わざとらしい奴じゃ」

小袖「本当です。お師匠さまが見えませぬ」

三郎太『ならばよし！ このまま修行を続ける』

小袖「はい！」

三郎太、床から取りあげた木刀（紙製）をふあふあと泳がす
様にして小袖に手渡す。

小袖「何と不思議、木太刀（木刀が）が宙に？」

三郎太「その木太刀（木刀で）、わたしを打ち据えられるか……ほれ、こちらだ！」

三郎太、動き回り小袖に声をかける。

小袖、三郎太の声を目掛けて木刀を打ち降ろすが、そのたびに木刀は空を斬る。

その時、外で物音。

三郎太『（気の抜けた感じで）な〜んだ、あの音は？』

三郎太の意識が外の物音にとらわれた時、

小袖「メーン！」

小袖の木刀が三郎太の脳天に打ち降ろされる。

三郎太『ウヌツ、ウヌウヌウヌ……』

三郎太、昏倒。

同時に、外より三人の忍者が飛び込んで来る。

小袖「何奴！」

一人の忍者……間、髪を容れず小袖の鳩尾みぞおちを突く。

気絶する、小袖。

忍者 A、B、小袖を倒した忍者に、

「お頭！」

お頭「うん、上手くいったの……（辺りを見まわし、部屋の外などを探り）

どうやら霧隠れはいない様じゃ。ここはワシが、お前たちは奥を探

せ！」

二人の忍者、別の部屋へ走り行く。

お頭、部屋の中の箆笥や小物入れ（無対象）などの中を探っている。

お頭「うん、ここでもない……ここでもない……一体どこに隠してあるの
じゃ」

気絶している、三郎太が朦朧もうろうとした声を放つ、

『……あ・あ・あ、頭が痛い、いったい何があつたのだらうね』

お頭「何だッ、今の声は？」

お頭、辺りを窺うが、

「誰もいない……空耳か？」

二人の忍者、壺つぼを抱え走り込んで来る。

お頭「おう、どうだった？」

忍者A「どこにも見当たりません」

三郎太『……内緒だも〜ん』

忍者B「おやッ、誰か居るのでは？」

お頭「いや、空耳じゃ、我ら忍者は日々忙しく働いておるので、疲れがた

まり、時々空耳げんちようなる幻聴きこえを来すのじゃ」

三郎太『毎日、大変だもんな〜』

忍者A「（一瞬、声に驚くが）成程……少し休暇を取らねば……」

忍者B「さよう。今は湘南の海が人気とのこと（ショーを行う地域）」

お頭「そんな暇はない！」

お頭、忍者Bの抱えている壺を見て、

「ところで、何だその壺は？」

忍者A「はッ、キッチンの隅に……」

お頭『キッ・チン』？」

忍者A「いや、台所の隅に……隠す様に……」

お頭『隠す・様に』。うん、あやしい……で、中身は？」

忍者A「はい、何か入っている様な？ ……」

お頭「なんだ、調べてないのか？」

忍者B「仕掛けでもしてありましたら、と思ひまして」

お頭『仕・掛・け』？ おい、(Aに)安兵衛やすべえ、お前手を入れてみる」

忍者A「わたくしがですか？」

お頭「嫌か？」

忍者A「はい！」

お頭「嫌なものを無理強いはせぬ。それがワシの性格だ。(Bに)おい、太た

ろうまる
郎丸」

忍者B「わたくしも怖いです。忍びの天才と言われている、霧隠れです。

どの様な仕掛けが……手首がちよん切れるやも」

お頭『手首がちよん切れる』？ (舌打ちをして) 意気地のない奴めが、

手首の一本や二本」

忍者A「お頭、手首は二本のみ」

お頭、自分の両手首を見て、

「お、そうじゃった」

忍者B「では、お頭が……」

お頭「お前たちはワシの性格知ってるようだな」

忍者A「ええ、頼まれたら『イヤ』と言えない質です」たち

お頭「生まれつきだ！」

忍者A.B「お頭……お願い致します！」

お頭「(明るく) あいよ！」

と、ためらわずに壺に手を入れる。

忍者A「お頭、何かありますか？」

お頭、壺の中を漁っている。

お頭「何か……？ あ、これは何だ？」

忍者B「何です!?!」

お頭「……何か……ヌルっとするな？」

忍者A「嫌だな、出さないで下さいよ」

お頭「おお、これは!?!」

忍者B「何です」

お頭「ベ・タ・ベ・タ……、あ、チ・ク・チ・ク」

忍者A「お頭、もうやめましょうよ」

お頭「お、これだ!」

お頭、壺の中から書状を出す。

お頭「あつた……幕府てんぷく転覆くわだを企てる密書だ! 宛名は……(書状の宛先

の文字を読む)『よしこちゃん』』

忍者B『よしこちゃん』? 何です、『よしこちゃん』って?」

お頭「霧隠れの別名だ。さすが霧隠れ……良い名をつけおる」

お頭、書状の中をあらためるが、

「ウっ、中身が無い。霧隠れの奴どこに隠したというのだ?」

忍者A「こうなったら壁を崩してでも家探ししましょう！」

お頭「待て、あまり長居すると霧隠れが戻って来るやもしれぬ」

お頭、小袖に眼が行く。

お頭「よし、この娘を人質に、密書と引き換えだ」

お頭、懐より矢立てやたを出しの密書の裏に、

「さ・ら・さ・ら、さ・ら・さ・ら」

と、筆を走らせ、床に置く。

お頭「娘を連れて行け！」

忍者A、B「分かりました！」

一同、部屋から立ち去ろうとした時、

三郎太『またね〜』

一同、振り返り、辺りを窺うが……。

三人「ううん、空耳か!？」

言い捨てて去る。

三郎太、我に振り返り、

「……どうしたんだ、何があったんだ？ ……ああ頭が痛い」

三郎太、書状に気づき、手に取って読む。

三郎太「……何ッ？ 『さらさら、さらさら』……しまった、小袖！ 『ト

書き！ 照明、暗転。暗転の中、俳優たち一同、板付き、照明が仄暗

く点く』

小袖、猿轡さるひもをされ縄を打たれている。

忍者A「お頭、霧隠れの奴は来ますかね？」

お頭「奴は、来る。噂じゃ人情に厚い奴だと聞いておる……ほれ、お出ま

しだ……霧が立ち込めて来たぞ」

忍者A.B「本当だ!?!」

忍者A.B、霧の中を泳ぐようなジェスチャー。

小袖「……（もぐもぐと叫ぶ、以下猿轡内の声）『三郎太様、来ちゃ駄目。』

わたしの命より使命を果たして下さい』

お頭「何ッ、『三郎太様、来ちゃ駄目。わたしの命より使命を果たして下さい

さい』だと」

忍者A「お頭、よく分かりますね」

お頭「台本に書いてある！」

忍者B「成程！」

三郎太、現れる。

もちろん、一同には見えない。

三郎太『(独白) お前たちは忍者の風上にも置けぬ奴らだ。忍者同盟どうめい

連判状れんぱんじょうにおいて、伊賀の郷さとに許可なく先入するものあらば、これを

成敗するとの掟おきてがあるのを忘れたか……思い知らせてやる！」

三郎太、三人に近づく。

お頭「……霧隠れはもう、この部屋に居るかも知れぬ。油断をするな！」

三人、間隔を置いて抜刀し身構える。

お頭「やい、霧隠れ……この娘と密書と引き換えだ。解ってるだろうな！」

三郎太、お頭のお尻を蹴る。

お頭「痛てッ……そうか、これがお前の返事か！ 安兵衛、太郎丸、娘を

斬れ」

忍者 A. B 「……」

お頭 「どうした、お前ら？ 娘を斬れと言ってるのが聞こえぬのか！ 出

来ぬのか！ よし、ワシが斬り刻んでやる！」

お頭、小袖を斬ろうと刀を振りかぶる。

忍者 A. B 「お頭、斬っちゃ駄目！」

お頭 「(明るく) あいよ！ …… (舌打ちをして) お前らワシの性格を逆手

に取りやがって……じゃ、霧隠れを始末しろ！」

忍者 A. B 「承知！」

三郎太、一同の隙を見て小袖の縄を解く。

暫時……見えない三郎太と棍棒を手にした小袖と忍者たち

との戦い。

いつしか霧が薄れて行く。

お頭 「おい、霧が消えて行くぞ……」

忍者 A 「あッ、お頭、霧隠れの姿が薄らと……」

忍者 B 「見えた、見えた！」

三郎太、何を思ったか、小袖の肩を両の手で掴むとくると
反転して逃げ去る。(三郎太と小袖が入れ替わったのである)

お頭「……霧隠れが逃げたぞ、追え!!」

忍者 A. B 「待てーッ」

忍者 A. B、三郎太を追う。

お頭、小袖に近づき、

「娘、見たか霧隠れの本性を、何とまあ情けない奴、臆病風ほんしやうに吹かれ、逃げて行ったわ、はは、はははははははは」

小袖、いきなりお頭の頭上に棍棒を振り下ろす。

お頭「ウヌッ、ウヌウヌウヌ……」

お頭、ぐらぐらと崩れ落ちる。

瞬時に黒布に隠れた人物が走り来て、小袖と入れ替わる。

倒れたお頭の前に立っているのは、三郎太である。

三郎太「……成敗!!」